

ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp



58



みさき動物病院獣医師
(高岡市京田)

三崎 朗子

私たちは普段の診療での問診時に、食欲や活動性の様子とともに、飲む水の量や尿量の変化がなにかうかがうことがよくあります。飼い主の皆さまは意外と水の減り具合やトイレの様子をよく見ておられて、動物の情報をきちんと教えてもらえることが多いと感じます。

飲水量や尿の回数・量は元々個体差があり、環境、運動量、食べ物、ストレスなどでも変化しますが、普段と違うと感じるときは病気のサインのこともあるため、注意が必要です。特に飲水量・尿量

多飲多尿

水を飲む猫。多飲多尿が症状に現れる病気は意外と多い



病気のサインかも

が増える病気は意外に多く、他の症状が出ないうちから見られることもあります。よくある病気としては慢性腎臓病など腎疾患、糖尿病や副腎皮質機能亢進症などの内分泌代謝性疾患、子宮蓄膿症などがあげられます。

慢性腎臓病は高齢動物での罹患

ら食事療法などの治療を始めることで進行を遅らせることが大切です。

糖尿病はインスリンの不足や抵抗性により高血糖が生じ、さまざまな代謝異常を引き起こす病気です。原因はいろいろありますが、猫では肥満が発症要因の一つで

率が高く、特に猫では主な死亡原因の一つです。ステージにより治療は異なりますが、早めの段階から

す。犬も猫も一般的にはインスリン投与で安定することが多いですが、併発疾患があったり、高血糖と代謝異常が進行したりすると致命的になることもあり、早めの治療が必要です。

副腎皮質機能亢進症は主に犬で見られ猫ではまれです。脳下垂体や副腎の腫瘍のせいでホルモンが過剰に分泌され、多飲多尿のほか多食、腹部膨満、脱毛、筋萎縮な

どさまの全身の症状が起こってきます。投薬による治療で症状が改善することが多いのですが、副腎や下垂体の手術や放射線治療が必要な場合もあります。

最後に子宮蓄膿症は避妊手術をしていない雌で発症しやすく、発情周期に伴う子宮の変化と細菌感染による炎症で、子宮に膿がたまる病気です。手術で完治する率は高いのですが症状が重篤になることも多く、致死率も低くはありません。症状は元気消失、食欲不振、嘔吐、下痢など特徴的でないことも多く、症状の一つに多飲多尿もあげられます。

これら以外にも多飲多尿になる病気はたくさんあり、病気でない場合もあります。いつも通り食べたり遊んだりしていても、飲水や排せつの変化に「あれっ」と思えることが病気の早期発見治療につながるかもしれません。